

## はじめに

CES18号をお手元にお届けいたします。

前号の「はじめに」でお伝えしたように、2016年4月から千葉大学文学部は改組して新体制となり、人文学科一学科になりました。そして日本文化学科は日本・ユーラシア言語文化コースと名前を改めることになりました。ただし、「本誌もユーラシア言語文化論講座の名前で出すのは、今号が最後となります」と申し上げましたが、どうも教員組織としては講座の名前はそのまま残っているようですので（よくわかっていない）、引き続きユーラシア言語文化論講座の名前で本誌を刊行していくことにいたします。

博士後期課程では小林美紀さんが修了し、現在札幌に拠点を移して、藤女子大学などでアイヌ文化の講義を行っています。バヤリタさんが修了生のムンクバトさんに続いて、今年度ロータリー米山記念奨学金を得ています。博士前期課程ではソロンガさん、吉田雅幸さん、欠ヶ端和也さんが修了し、ソロンガ、欠ヶ端両氏は博士後期課程に進学。吉田さんは一般企業に就職しました。

教員の動向ですが、中川は引き続き北海道大学から受託研究費を受け、現在院生諸氏とともにアイヌ語諸資料のデジタル化作業を進めています。また、文化庁の助成による二風谷アイヌ文化博物館の所蔵テープの整理作業にも、院生ともども協力することになり、2017年2月には二風谷との合同研究会も千葉大で開く予定です。田口は、相も変わらず貴州省ヘミヤオ語を調査しに行っておりますが、一方、今年度から日本歴史言語学会の事務局長となり、研究室内に事務局を抱えることになりました。今後2年間学会関係に注力することになりそうです。吉田は夏季には11年ぶりに牧畜民の食性研究プロジェクトの一環でツンドラ・ネネットの現地調査を実施しました。こおりした北海道における氷下漁撈の研究も継続しています。また11月には本学内において千葉大学大学院人文社会科学研究科地域センターとの共催で日本シベリア学会第二回研究大会を開催し、担当幹事として尽力しました。児玉は育休から復帰して1年がたちました。その間、モンゴルに調査に1回行くことができました。現在、主に取り組んでいるのは赤木祥彦福岡教育大学名誉教授が収集した乾燥地および沙漠化に関する論文のデータベース化作業です。児玉が産休＆育休期間中に代用教員として着任していただいていた古澤文さんは現在、片倉もとこ沙漠文化記念財団の研究員として、乾燥地研究に従事しています。周は、言語教育センターより今年度に発足した国際教養学部に配置換えとなり、普遍教育中国語科目の運営と実施に従事しながら、国際教養といった未知の世界に足を踏み入れることになりました。早速学部発足記念の千葉大学シ

ンポジウムに関わりました。研究では科研最後の年に研究のまとめとして移民家族における教育といったテーマを中心に学会などで発表しました。

2017年度には、今度は大学院のほうが改組することになっており、人文社会科学研究科から公共人文学府という、わけのわからない名称に変更になりました。で、それにともなって「日本・ユーラシア文化」という研究教育分野が設定されることになりましたので、10年ぶりに大学院にユーラシアの名前が復活することになります。

わが大学が何を目指しているのかよくわからない今日この頃ですが、ユーラシアはその中をしぶとく生き抜いていこうと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

なお、この CES18 号の編集は児玉香菜子が担当いたしました。

2016年12月 中川裕